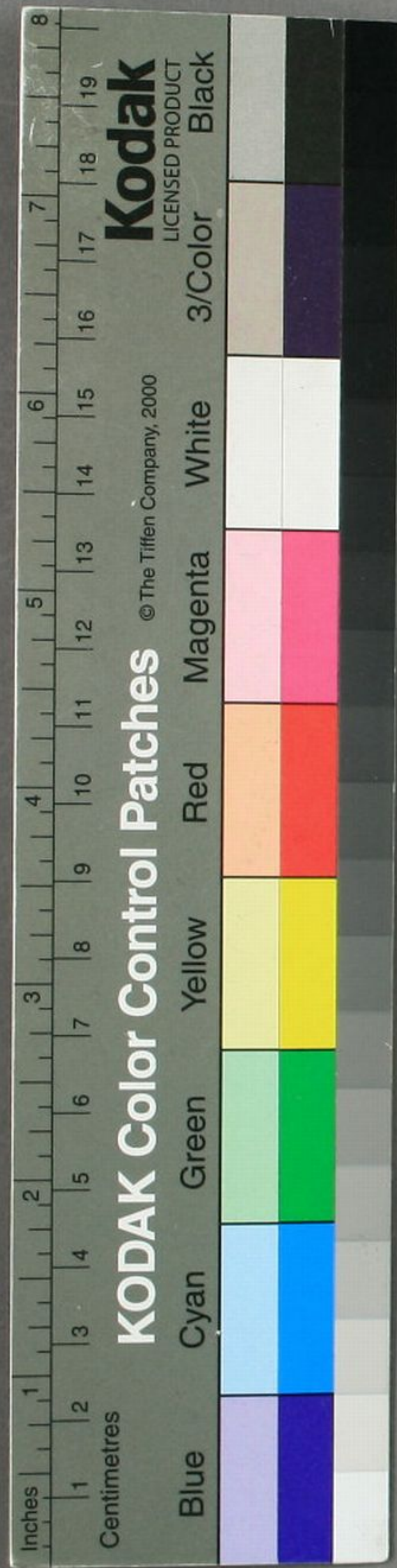




中村俊定文庫
文庫 18
957



月之沙

師竹菴吾山編



此巻のよゝありんはるゝを
しるしをうゝるゝをうゝるゝを
はるゝをうゝるゝをうゝるゝを
うゝるゝをうゝるゝをうゝるゝを
うゝるゝをうゝるゝをうゝるゝを
うゝるゝをうゝるゝをうゝるゝを
うゝるゝをうゝるゝをうゝるゝを
うゝるゝをうゝるゝをうゝるゝを

十分の春もやされい海の月を
 くれ満ちて流るるも又十分の
 秋もあはれに月夕の二葉と
 二葉を〜〜〜〜〜編集する
 ともわらうそなりなる今やさういにて
 の流るる流るる枝川ありけりわれ
 とも源に〜〜〜〜〜あ〜〜〜〜〜新
 なる心のなまりと自他親疎とを

てんきつ〜〜〜〜〜板のふせゆると
 心を師の風流を〜〜〜〜〜ふつ
 くにけり海と流るる物あり

輕舟序

潮隨月乎月隨潮乎月與潮
相從不容言也由是觀之隨
月運行亦明矣謂之進退者
法以為候也其相隨之形觀之
猶如拿月輾轡也潮雷也必
不外是余久持是說而莫敢

應者近越谷吾山載筆行天
下取近世以來佳句警什者
于四簷以慰長途之中雅士
剪錦裁綺益增其光津以
爲師計盈量虛切精其候
者謂于之珠滿之珠復出于

今可也雖不親行載筆功亦
不侔乎哉

東海釣翁撰

林大學以爲足
滋井平九書



東江書



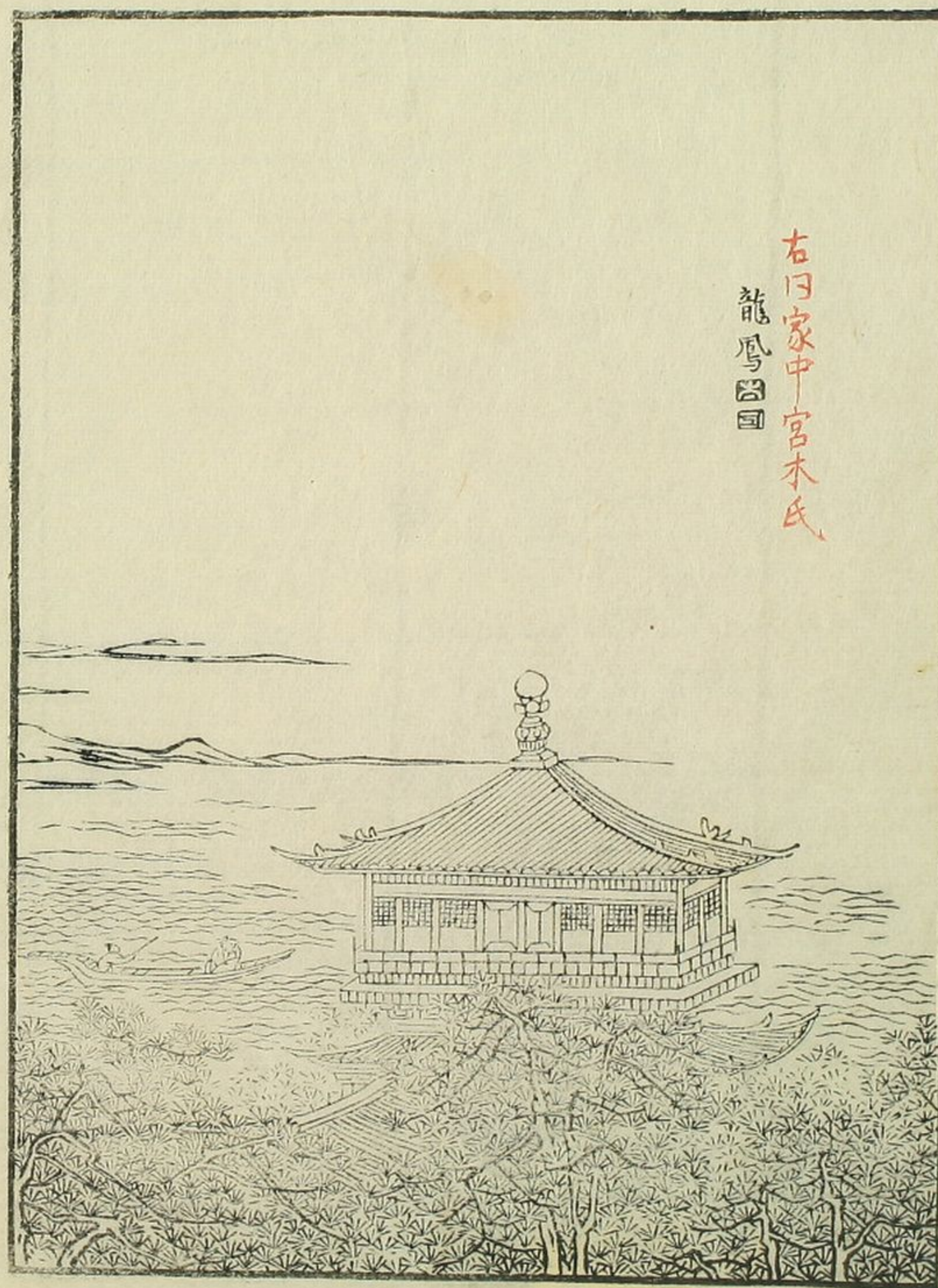
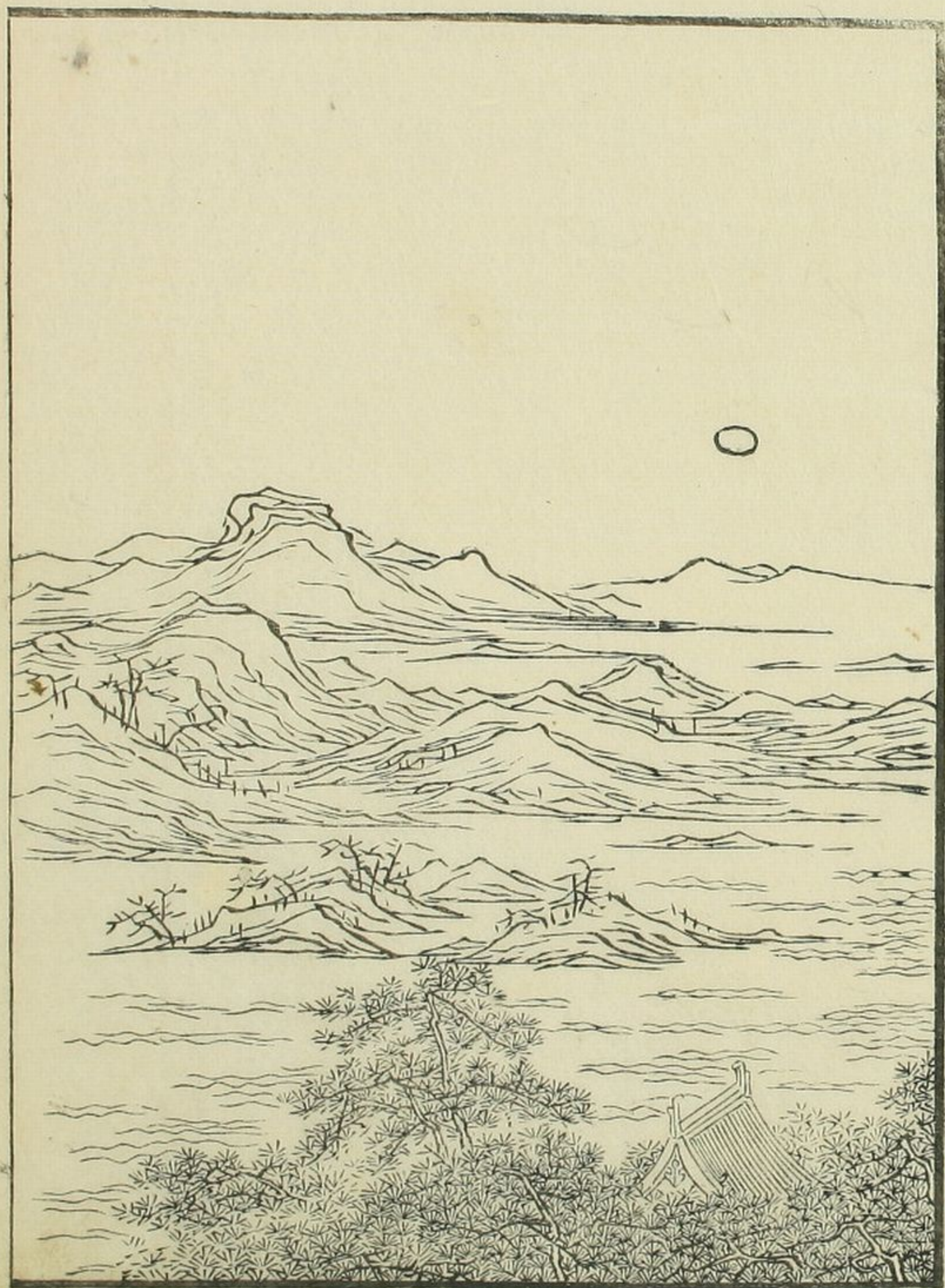
秋无东海月
美因共回看
梨入洞底画
岳阳楼上图

七十二翁

东溪

印

松平周防守德官



右田家中宮木氏
龍鳳圖



月と汐卷之天

三五夜月

けしきもなほしき月見所

題目

可季ともし
池のほとりひらきうき

海棠の花と汐のいりきり月

あきば魚の陸のおほき月

あきば魚の目と光のきり月

入おを又あけおのり月

松平周防守
沖寂

世音

亀章

伍丈

柳宇



三まゝの舟をうつゝにみおはせ

昔はてふ土ん何うけりよの月

あゝ菊ふき草のてうや月二枚

は月であゝに調まはあそ

美ううあはまる客やお月

月の中月の世あゝあるお月

落葉を拾ふあゝは月

十五のお月一月と十三夜

能勢筑前守

輕舟

一帆

湖大

温

薰風

千町

此君

百菴

松平周防守室

春人

藤幸

寒光

存可

東羽

鶯言

機管

宣我

水底をまぐろ玉とすよの月

柳をそよの色あま十三夜

やけに孤はいつ十三夜

面壁の僧もいつ月をみ

あゝは月をいつみおはせ

いとこれおの要やあま月

ゆれこれと膝ぬきさの月をみ

めはこれの田うみさの月

菱花の光君ありき月

松平周防守 菱花

良お蝕なりけ

清うふも内々もあてきよの月

丹花

それ新くささ起せりよの月

野梅

明月で関の流りよのまゝに

古月

清おれおのの流りよの月

子徳

流流りの流りよのまゝに

尾言

わ〜〜月吹おれ流流り

晋窗 湖十

おそふあゝ月今宵

千露

むのちの枝を流しおの月

危言

さつちのあゝ月あゝ月

吾嶺

ふ〜〜あゝのまゝおの月

珪組

月お〜〜あゝのまゝ秋夜中

蓑笠

石山でわ〜〜あゝのまゝ月

朗笛

我流を〜〜あゝのまゝ月

東秀

名目やあゝのまゝ月

百壽

和橋 姑山 秋色 佳夕 九包 吾珪 至丸 小好

秋色 姑山

佳夕

九包

吾珪

至九

小
好

笑尺 祇雀 蟻城 角之 其帳 芳喬 秀里 杉風

僧

唐海に松の川河をよの月
池の月山つちと一と明あけ
おろろおや月もつれもそ
羊柳をよの月をよの月
山吹の池を捜さる月
日より月をよの月
をよの月
をよの月

星芝 恭川 吾中 紀開 花光 涼山 菊人 卧猪

天
十
貞平大膳大夫

十六おや松の川河をよの月
池の月山つちと一と明あけ
おろろおや月もつれもそ
羊柳をよの月をよの月
山吹の池を捜さる月
日より月をよの月
をよの月
をよの月

花徑 千水 吾秋 吾言 百馬 扇峨 文洗 呼童

本町 素良屋某

さうれれしえ推しにふ活をわて
あつて人ゆゑおつ十三お月を

濱所水野

きぬうけく妹あつて一と橋の月 知足

まてまてこの雲は月今て言 北川

けれれれめめ花と十三水 雀子

三日月のちいさきとちう嵐山 以一

けれれれお揃るるもちりあつて 羅文

それれれと一木あるもあつては月 文筆

明星と二水の月お月あつて 艸秋

うハ澄の苗一清水と然月 朱英

名月や水の志れ一の針とく 山帶

名月や地ふを事陰のあつて 都友

あつて水の神のいぬおつて 路榮

ふく海とちいさく一二月 葉山

雲居のむし一清水とあつて 魚行

すけけけけおぼく富の月 百輅

ふくことおぼくくする月とく 玄々

三日月のおふか魚河で十三夜
あけの河と志度くやう三日月
花をさくこころいりあけ月
名月すくこころあけ月
うきこれいれあけ月
名月すくこころあけ月
名月すくこころあけ月
名月すくこころあけ月
名月すくこころあけ月
名月すくこころあけ月

風雀
帆石
湖舟
半秋
月詠
百長
長眉
芋月

斤里と渚のふか魚河で十三夜
あけの河と志度くやう三日月
花をさくこころいりあけ月
名月すくこころあけ月
うきこれいれあけ月
名月すくこころあけ月
名月すくこころあけ月
名月すくこころあけ月
名月すくこころあけ月
名月すくこころあけ月

春蟻
芳柳
かつこ
其楓
女お沢
梅言
八王子
吾朋
門盡
霜後

千住

いじろは習く家へ後の月 榮督

強ひたれ客へ月への二方極 吾千

名月や蘭の糸もある極乃之 竹塚 賀梅

東の戸乃更とこま那し月の友 栗原 東子

吹雪を今えは多うさりよの月 セサキ 良霸

秋の水や月漬めをさしひやの 浮ツカ 祇敬

ハ系を丸めくえきうきやあ月 戸蜚

音くえきうきやあ月 千加 綾坡

三日目へ産の空へぬ軒の店 千駒

丸くちるわとちんきとをり月 十雨

名月へ文うね無れ松一本 龜游

能くね能くさうにへ新月 冬松

心もも空をさしよあ月 文壽

梅う香りりりりり新月 蒲生 文峰

苦ううう風もきりりり月 仙里

名月の氷碎くへ水訓掉 湖水

名月てそ七くはをふのちる省	吾竹
名月や若菜の鶴もまれす	鯉山
名月や波の結ふ心孫あき	登戸 雪後
文より竹節なりけり月	七鳥 都江
日や白く睡る月を照けけ	吾舟
名月や日影に振る付く	泉涼
月よりひ鶴の影つとやけを	江使
名をちひもつてね十三次	鳥山

今月一蘭をまふのち夏の月	未田 九貢
名月や雲ふと月をく	葛西 素狐
名月や雲ふと月をく	越谷 一志
名月や雲ふと月をく	朝市
名月や雲ふと月をく	吾郷
名月や雲ふと月をく	鳳更
名月や雲ふと月をく	文柳

名月や燕の奴乃頼うと衆
 名月やいひ出しもせぬ日如山
 系二入日を夜隙やさすの月
 名月やせうくふりたる鶴りや
 おり人の声走ふあうかろ月
 乙ぬうもこれるまをぬの月
 猿のおちにふあし音の月
 あてもなきふくのぬり月ふか
 来義
 李天
 具角
 嵐雪
 芦水
 春路
 龜童
 不言

奢はく澆やんや乃は月
 松影の半是る燕の月ふか
 露結のりほもぬの月見うね
 月乃出る柏子もむる結うね
 月おこし名あをさし十三夜
 十六おや中夜の連れいとう欠
 世かほくつぬや月の海ささ
 うねうもいふ竹山乃月れ毛
 白ふか
 二木
 三河吉田
 古帆
 田原
 涼歩
 石意
 保美
 免十
 赤坂
 洗忠
 法油
 冬里
 安房
 涼花

山々山ありあいの香やうの月
沈つた山あふきくはの月
越るえきハ海お川こいなる月
十三夜刈田ほとふハ光せせに
月ほしゆくの笛をほる海
海山を目も雲もさる月るか
名目やうの鳥も三千里
葉の戸や柳をいとも然月

信州

思可 穠花 胡月 紫茸 柯則 花山 笠坊 可乙

入るる浪あつちうとらうの月
寝るる月やうの月
さるる風やうの月
りるる山をほるる月
遠回士るる月
迷航もくはるる月
象あふはるる月
水あふはるる月

下流水あり

自徳 吾友 皋夕 富竹 希成 梅山 春帯 岸耕

其の月橋川お杉の木はるか
 名もやるをふりて殿のき
 橋はるこの多きえ遠はるの月
 月をきれてりるを流すの月
 廣の山河まゝのくみは月
 水すくのきとけりり、お月
 えぬものをみればつるの月
 えりてもくし中へはる月

朽木 塞駒
 鳥山 駒井
 素由
 如山
 玉潤
 妻沼 素江
 南部 淡志
 上毛 一軒

其の月の橋をきれてはる月
 名もやるのきとけりり
 月の河をくみはる月
 名目や山河もまゝのくみはる月
 名目や兵庫へくみはる月
 名目入るやあはる月
 名もやるをきれてはる月
 名目や新の百はる月

相州浦賀 銀甲
 右柳
 吾涼
 文里
 吾成
 大津 台斗
 麥林
 柳居

歌仙

名月つ雪中ふ己、爰披し
あゝ青うろくしれきあむ娘
だゝあま清くほし唱連う
すれそふとみねうらりき
むつしよ慕ふ河うとみりそん
近川とくろと雪車の入知を

吾山
野梅
伍文
風雀
柳宇
古月

挑灯をやとみそれみ吹消を
三千丈の底み井戸知を
典座の酒をふみうきぬを
暖帳をさしつゝもろくいす
涼風のそうつくと畠越し
霞ふ油をれ妹のいも親
奥中ふ世にるききいりやん
しし決をふれはれん

寒光
山
梅
宇
雀
文
月
光

かすくの湯棚の煙あつてき
月をいつこり厚の声
左近のちりはせむおはれ
細の細工流乾くくちうふ
ほくくと馬のほうの町とつと
ほがえきり野河の利立
ひつちうの湯もまたうき河に
毎わあつとくお汁系

世音 丹花 菱花 子德 龜章 山 花 音

河もくも河系も系し松はる
渡りやうく勢田のき流
幅急なく十八日おれあつて
あつちうき系取年を取
いはまてと系あつち系あつち
降おはれいしきくこれ市
ゆるきなく立休ふてお月お
きくゆる古を居合つ

徳菱山章 藤章 山 春人 幸

ふみ居いせの山田の歌を
ふり居くおのれ廊付
むきくらゐの歌を
おのれ向う歌の歌を
あそこのも歌を
舞あつた歌を

山 人 幸 山 人 執筆

八月 漢 漢 漢
書 中 萬 里 歌
應 志 願 欲 化
氣 動 無 休
七 十 二 年 東 漢



月と汐卷二

題沙

ゆきしやう

うさかちやう—ほむも浦の春
汐や客の宿あふ中多う
毛纏をりより海帆や汐干涸
汐は—然るに何れを取ふ—

芭蕉

其角

乙由

柳居

去る流とあるは川に流るは
初はの山を流るは川に流るは
馬を河を流るは川に流るは
満一かや枝を流るは川に流るは
止るは山を流るは川に流るは
流るは山を流るは川に流るは
流るは山を流るは川に流るは
流るは山を流るは川に流るは

春人
世音
亀章
野梅
古月
存可
花丈
本来

おしや入るは川に流るは
流るは山を流るは川に流るは
流るは山を流るは川に流るは
流るは山を流るは川に流るは
流るは山を流るは川に流るは
流るは山を流るは川に流るは
流るは山を流るは川に流るは
流るは山を流るは川に流るは
流るは山を流るは川に流るは

菱花
丹荅
花曉
佳少
ちよ
太無
北川
吾珪

增

米翁 千醵 薰風 輕舟 一帆 冬映 溫克

田橋井上氏
來義
李天
九包
東羽
以一
圭督
尾谷
鳥醉

と片はて海濱の松をみかほし
任吉や沙干の釜も田植のや
留袖を長くおほしう沙干の
新言の娘も何さうか干結
早し女の脰まつうさ沙干の
浪浪やいふとも若お湊はし
豆粒や沙干の枝の中
りしそ茂をほふまういふ

和橋 鶯谷 朗笛 文洗 路采 鳳山 玄二 不言

そや船を水まきう沙干の
親うを裸そあへ沙干の
ふきももさう沙干の浪あし
帆立貝その帆もさう沙干の
まつはて屋の板の藤もさう
おはて魚のさうく鳴る浅
はつはて鰐も波へはしてあは
まの浅くも藤もさう沙干の

瀾長 虎卵 文石 春路 芦水 星芝 春江 烏明

地六
奥平大膳大夫
母

わと粒一俵ありやし干し
菊人

男と女とふりてをば干し
吾中

あはれ日もし干ぬ岩のくはくは
妻沼
煮江

はとく指のむやう干し
越谷
朝市

しほのつとめはて岸の藤
一志

おしや畑をいふふ減ちとて
泉石

うはしや岩の庭の掃除波
五鳳

大はる吹きそとちふふふ
鳳更

楊下と鶴あそぶ干し
文柳

お夢をとれ岩のくはくは
吾郷

はとく指のむやう干し
大沢
斗山

おしや魚木よりわかれ不ちと
珪組

おしや岩のくはくは
湖舟

吹きそとちふふふ
至九

涼風と藤のくはくは
百長

おしや足洗せれかし
加賀
希因

嘉穀

吾言

都友

帆
石

長眉

谷原
汝州

大進保
民阿

セナキ
祇敬

涼山

湖大

千水

卮言

花徑

野菊

山花

五陵

地七

伍文 柳宇 風雀 鼠子 扇蛾 雀子 涼傘 牙琴

東水 塞駟 兩竹 如山 玉澗 素由 淡志 其帳

枝川のわがしにあらはし干し
 洲の松の風もくやは干し
 毛織の味いもくやは干し
 まつたや海家の目もくやは干し
 を目もくやは干し
 根のくやは干し
 裾袖のくやは干し
 しのくやは干し
 吾身

山帯
 来舟
 逸豫
 吾川
 榮督
 泉涼
 江使

やくは干し
 浪電のくや
 しのくや
 沖と照臨
 しのくや
 雪のくや
 春帯
 岸耕
 富介
 泉少
 此君

千加
 綾坡
 千駒
 水海道
 千住
 七島村

初一はくさくさくさくさくさくさく
 二つはくさくさくさくさくさくさく
 三つはくさくさくさくさくさくさく
 四つはくさくさくさくさくさくさく
 五つはくさくさくさくさくさくさく
 六つはくさくさくさくさくさくさく
 七つはくさくさくさくさくさくさく
 八つはくさくさくさくさくさくさく
 九つはくさくさくさくさくさくさく
 十つはくさくさくさくさくさくさく

寒光
 機管
 笑尺
 戸蟹
 桑孤
 分江
 文峰
 白抄

初一はくさくさくさくさくさくさく
 二つはくさくさくさくさくさくさく
 三つはくさくさくさくさくさくさく
 四つはくさくさくさくさくさくさく
 五つはくさくさくさくさくさくさく
 六つはくさくさくさくさくさくさく
 七つはくさくさくさくさくさくさく
 八つはくさくさくさくさくさくさく
 九つはくさくさくさくさくさくさく
 十つはくさくさくさくさくさくさく

文里
 吾成
 有柳
 銀甲
 吾涼
 湖水
 忠可
 胡月

吾嶺	吾月	吾秋	龜童	吾鳳	蘭喬	雪江	夜江
とほしよ申てをさつてさ	はつ——ふ目よハゆ——のたの上	おしやふおのゆふさふ	る川はや一のふおのふてほれ	珊瑚珠を海よと河よは干近	波おとハ松よとふあれは干持	飛くふお海の水れは干留	川はや湯水もゆれおれ上

湖十	市成	仙里	龜游	冬松	東子	賀梅	百馬
おはさふ——と教れ部	はらうふふひふ海の水の音	海人のふふふれふふふと海衣	おしやふふむ海の水の音	吹ぬ口はしふと柳の音	あふれふ身ふふふと海士の水	とほしや井の水の音	お——はと鶴の水の音

一去より久しき暑しさをこぞ
 羨みたるおし時の山にたかく
 はつばやふよふのうつつを望む
 おしや、みのつらえられ惜ひつ
 と暮る舟やし千の沖をまは
 り秋やぬふ目も遠く汐境
 三月月と満ちて缺れし干さ
 おしや底をあつまずけ声の夢

女

吾山	宣我	紀開	朱英	沾梨	春蟻	枳輔	濯文
----	----	----	----	----	----	----	----

羅文

枹輔

春蟻

女

沾梨

朱英

紀
開

宣我

吾山

智者ハみと樂シ仁者ハ山と
 水とを以て己を愛するも
 其の愛もあつたやうに
 心はさうしてほろろの
 恨と海とにはほろろの
 あつたやうなところ
 類句を求て月夕の句と

ちる人ハさうや肝竹菫のこゝろ
 いふの御座さうしてはるれえ
 をかけふの式乃月神の湯も
 うさうさうさうさうさう
 とおくおとくさうさうさう
 うさうさうさうさうさう
 うさうさうさうさうさう

唐々々々々々々々々々
——いふ

不二亭

束義跋

神田橋井上氏

240



